
俺と妹とそれから魔法！

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と妹とそれから魔法！

【Nコード】

N2593W

【作者名】

白夜

【あらすじ】

魔法使いを育成する中高一貫校の国立魔法学校

ここ的高等部2年に所属する藤島巧と

中等部3年のスーパーエリートの俺の妹との学園魔法ファンタジー

！

俺と魔力(前書き)

目標は完結を目指しています。

あと不定期更新ですがよろしくお願いします

俺と魔力

かの福沢諭吉はこう言った

「天は人の上に人を作らず」

・・・こんなものは嘘だ

なぜなら現にここに通常と桁違いに高い魔力を持った少女と

通常と桁違いに低い魔力を持った少年がいる

この桁違いに低い魔力を持った少年こそがこの俺、ふじしま藤島 たくみ巧である

そして桁違いに高い魔力を持った少女こそがなにを隠そう俺の妹の

ふじしま藤島 さき咲なのである

魔力には属性がある、「火」「水」「雷」「土」「風」の5種類である

俺の属性は「火」だがさつきも言ったように俺の魔力は極端に少ないのでどう頑張ってもライター位の火しか出せない

ちなみに咲の属性は「水」小さい湖の水すべてを操れるほどの魔力を持っている

妹のすごいところは魔力だけではない

俺達の通っている国立魔法学校の入試試験を実技、ペーパーともに1位で合格

8歳から俺と一緒にの道場に通り空手、合気道、剣技などを習得し町を歩けばモデルのスカウトマンが集まってくるし

毎日毎日、咲の靴入れからは大量のラブレターがあふれてくるのだまあそんなわけで俺の妹は神様に好かれているらしい

++++
++++
++++
++++

そんなことを言っているうちに4時限目が終わって昼休みになった
そして俺に近づいてくる人間が1名

「よっ」

こいつの名前は荒井あらい 雄二ゆうじこいつとはむかしからの親友だ、ちなみに属性は「雷」

「なにうかない顔してんだよ」

「いやあ俺と咲って何でこんなに違うのかなあと思って」

「しょうがねえだる魔力の量は生まれた時から決まってるんだぜ兄弟でも魔力の量は関係ない」

そう魔力の量は生まれた時から決まっていてそれ以上減りも増えもしない

だが、だからと言ってなにもしないやつはそれ以上伸びない

魔力をいくら持っていていようとそれを操るだけの精神力と集中力がなければないも同然なのだ

いくら特訓をしても魔力は増えないが精神力と集中力は違う特訓をすればするほど精神力と集中力は強くなっていく

この俺が国立魔法学校に入れたのも5歳の時から道場に入り厳しい修行と合気道、空手、剣技といった体術や剣術を学んできたからである

「おい、聞いてるか？」

頭の中でぶつぶつと語っていた俺に雄二が話しかけてきた

「ああごめん何だっけ？」

「だからこれだよこれ」

雄二は1枚のチラシを僕の机の上におもいきり叩きつけた

もう少し加減ができないのだろうか？そう思いながら僕は耳を塞ぎながらチラシへと目を向ける

「新学年魔法お披露目会」

チラシにはそう書いてあった

そう俺は今、そろそろ学園にも慣れてきたほかほかの高校2年生だ
この魔法お披露目はクラスが変わって新しい友達を作るために各
クラスで毎年行われている恒例行事である

・・・俺はこの行事は大嫌いだ

なぜかって？それは俺がふんばってライターなみの炎を出したところ
で空気がしらけるだけだからである

「んでこのお披露目がどうしたんだよ

言つとくけど俺はこの日休むからな」

「そこじゃなくてもうちょイ下みろ下」

「下？」

第一回国立魔法学校主催マラソン大会のお知らせ」

「・・・・・・マラソン?!?!?!」

「そうマラソンだ」

「ちよつと待てそんなの絶対魔力強い奴の方が有利じゃん」

そう魔力の強いやつは魔法を使って何らかの方法を考えてくるだろう

俺の妹の咲も朝、水をスケボーのようなものに形を変えてさっさと
学校に行ってしまった

ある程度の魔力さえあればどの属性でも自分の属性と一緒に物質で
あれば形を変える位容易にできるだろう

「安心しろこのマラソンで魔法を使ったら失格になる

ちなみに失格になった奴はペナルティとして1週間の補修が与えら
れる」

「でもなんでそんな急に？」

「んー校長が言うには『一流の魔法使いになるには体も鍛えねばな
らん』だそうだ」

「ふーん」

自分で言うのもなんだが体力には少々自信がある

まあ5歳からあの人の元で修行させられてきたら体力もつくだろう
そう俺が5歳の時から通い続けている道場の道場長であり俺と咲の
師匠でもある

そういえば最近道場に足を運んでいない

「放課後にも咲を誘って行ってみるか」

そう決意をあらわにしさっさと昼食のサンドイッチを食べつくし5
時限目へと挑む

師匠 大河 虎一郎（前書き）

更新遅くなつてすみません

師匠 大河 虎一郎

放課後、咲と連絡を取り校門の前で待ち合わせをした
しばらく待っているると中等部の制服を身にまとった咲が校舎から出
てきた

「ごめんね、兄さん待った？」

「いや、今来た所だよ」

「そっかじゃあ早く師匠の所行こっ！」

こんな普通の会話をしながら俺と咲は師匠の居る道場へと向かって
いく

ちなみに移動は徒歩だ咲なら朝のように早く行けるだろうが、まあ、
そのへんは俺に気を使ってくれているのだろう

+++++

数十分歩いていると師匠の家について

師匠の家は完全に和風で庭には大きな松の木や錦鯉のいる池など、
とにかくすごい

俺は大きい木の扉の横にあるカメラ付きのインターホンを押した

「おお巧じゃないか入れ入れ」

インターホンからはずぶとい声が返ってきた

カチっと言う音とともに大きな扉のロックが解除された

「失礼します」

扉を開いて普通に挨拶する俺に何やら普通ではないものが飛んできた

「矢」そう「矢」である師匠が放ったであろうその矢は俺と咲の頬
のすぐ横を通過し大きな木の扉に突き刺さった

「うーむもう少し右だったか」

目の前を見ると平然とした様子の師匠が立っていた

「ちよつと師匠！殺す気ですか！？」

「ああ、すまんすまん、だが、これ位の矢をかわせないようでは自

然界では生きていけないぞ」

「俺は自然界で生きる気はないし行く気もありません！」

そうこの人が残念ながら俺と咲の師匠、大河^{たいが} 虎一郎^{とらいちろう}なのだ

実はこの人、完全な人間ではない、半分人間、半分動物なのだ、しかも虎の血が半分流れている。別に父親が虎とかそうゆうわけではない。これは「人間」や「動物」と言ったものと同じ「動物混じり」と言う種族なのだ。

「それはそうと何の用だ？」

『本当に反省しているのか？この人』などと思いながらも質問に答える

「いや、最近来ていないなと思って」

「おお、そうかそうか……ならば巧、久しぶりに稽古をつけてやる、道場までついて……」

『来い』を言い終える前に言葉が途切れた、俺の後ろに居る咲に気付いたからだ

「おお咲、咲じゃないか」

「お久しぶりです師匠」

「うむ、久しいな……それに少し美人になったか？」

「い、いえそんな」

少し恥ずかしそうに咲が答える

「そうだ、この前うまいレストランを見つけたのだが今度一緒に……」

師匠の言葉が言い終える前に俺の超スーパーハイパーウルトラチヨ

ップ（自作）が師匠の脳天に直撃した

「いつてええええ」

「40過ぎたおっさんがなに言ってるんだ！」

「俺はただ食事に誘っただけだ」

「……それならいいですけど」

怪しげに思いながらも、俺は会話を続ける

「じゃあその後ホテルで……」

師匠の言葉が言い終える前に再び俺の超スーパーハイパーウルトラ
チヨップ（自作）が・・・当たらなかった

師匠が華麗なバックステップで俺のチヨップをかわしたからだ

「この俺に2度も同じ手を通じると思うなよ」

・・・この人虎の動物混じりだけあってやたらと身体能力が高い

「くっ」

「まあホテルうんたらは冗談だ安心しろ」

「師匠はもつと・・・」

「それより早く道場行くぞ、咲、お前もついて来い稽古つけてやる」
そうして俺達は道場へと向かった

師匠 大河 虎一郎（後書き）

これからテストなので1週間ぐらい更新できません
テスト終わったら2週間に1回は必ず更新していくのでお願いしま
す

道場

何度も言うが師匠の家はすごい、どこがどうすごいのだと聞かれてもすごいとしか言いようがない

例を上げるのならば色鮮やかな錦鯉の泳ぐ大きな池とこれまたおおきな松の木そしてきわけつめには地下施設までこの家には存在している

まあ要するに豪邸というものである。そしてこの地下施設こそが俺達が幼いころ通っていた道場なのである

いったい何処からこんなものが建てられる金が出てくるのだろうか？
実は裏で殺し屋でもやっているのではないだろうか？

と、思った事も度々ある。一度師匠に「師匠の仕事って何ですか？」と聞いたことがあったが笑顔でスルーされた

そして今俺たちはその師匠の家の地下一階の道場へと来ている

「さて、そろそろ始めるか」

「……師匠、何度も言いますがその格好どうにかならないんですか？」

咲が恥ずかしそうに目をそらして言う

師匠の格好……それはどこからどう見てもフンドシー丁。このまま外へ出たら町の平和を守るポリスマンに職務質問されてもおかしくない……いや絶対される格好だった

「ああ、稽古をつけるときはいつもこの格好だからな」

お年頃の中学生の妹にフンドシー丁姿を見せつける40過ぎのおっさんを見てすぐに携帯電話から110番という呪文を使ってポリスマンを召喚しようと思ったがまあ今回は見逃すことにした

「おい巧、お前も早く準備しろ」

「俺ならもう準備できていますけど……」

ちなみに俺の格好は学校指定のジャージだ。国内トップの学園の指定ジャージだけあって動きやすい

「……何を言っている、早くフンド……」
「却下！……！」

「何を言っているんだ。お前も昔はこれをつけて稽古にはげんていたんだぞ」

「そんなもんこの年で着れるわけないだろ！第一妹の前でフンドシなんて着けるか！」

「別に家族なのだからそんなに意識することもないだろう。そこま
で気にするなんてお前、シスコンか？」

「……兄さんが私のことをそんなにふう思ってたなんて私どう
しよう」

「誤解を招くようなことを言つな！そして顔を赤くするな！」

「うそ……なの？」

咲が首をかしげて言う

「当たり前だ、ご近所で噂が立つたらどうするつもりだ」

「……兄さんのバカ……」

咲が小声で何か言っている

「ん？なんか言ったか咲？」

「な、なんでもない！兄さんには関係ないでしょ」

少し怒った顔で咲が答える。なんでだろう？まあいいや

+++++

「とにかく、やるんでしょ？早く始めてください」

「なにをやるんだ？……まさかっ！エッチいことか！？エッチいこ
となんだろ！？」

師匠が茶化すように言った

「に、兄さん……私とエッチいことしたいの？」

咲が赤面させて言う

「もつそつという話いいからちゃんと」
「」で区切りつてあるだろ！

「冗談だって冗談。お前は何でも真に受けるな。」

「冗談言っていないでさっさと稽古始めてください」

「そうだな……では、いくぞ巧」

師匠の目の色が変わった。その色は数秒前まで俺や咲を茶化していた目とは違う。

自然界の肉食動物が獲物を狩る時の目、師匠の今の目はそんな目をしていた

空気が『ピシッ』という音を立てて静まり返った。

張りつめた空気の中で師匠との戦いは始まった

そういえば競技種目を話していなかったな。

競技種目は『大河流対魔術師用体術』

道場（後書き）

なんか久しぶりの投稿でどんな話が忘れちゃいました（笑）

1、2話と比べると少し変になっていると思います

ps

ここがダメだっ！と言つところがありましたらどんどん指摘お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2593w/>

俺と妹とそれから魔法！

2011年11月24日00時49分発行